

ミズアオイ 大槌に

いわてレッドデータA

いわてレッドデータブックでAランク(絶滅の危機にひんしている)に分類される希少種ミズアオイの群生地が大槌町の津波浸水地で見つかり、関係団体が保護へ動きだした。津波が土を掘り返し、地中深くにあった半世紀以上前の種が発芽したとみられる。関係者は「震災を経て得られた一種の遺産だ。現状のまま残し、災害と生物多様性を次代に伝える場にするべきだ」と訴える。

浸水地に古来種か

「震災遺産」保護訴え



湧き水でできた湿地に自生するミズアオイ

調査する東京都のNPO法人日本ビオトープ協会と、同町の任意団体三陸自然学校大槌によると、群生地は震災翌年の2012年夏、市街地の町方地区で見つかった。湧き水によってできた湿地で、約300平方メートルに20株が自生する。周辺は1950～60年代に盛り土し宅地化されるまでは田んぼで、ミズアオイも見られた。津波が表土を

掘り返して地中の種が地表に出て、湧き水で塩害を免れ芽吹いた可能性がある。ミズアオイは雑草として駆除され、現存する個体の大半は農業耐性を得た変異種とされる。これに対し大槌の個体は、県立大の平塚明教授(植物生態学)が調べたところ、農業の影響を受ける以前の古来種とみられることも分かった。同協会の野沢日出夫副会



群生地上空に小型無人機を飛ばし、生息域を調べる関係者＝17日、大槌町

長と三陸自然学校大槌の白沢良一代表らは17日、群生地上空に小型無人機(ドローン)を飛ばして分布域などを精査。一帯を現状のまま残して耐性型との交雑を防ぎ、保全する重要性を再確認した。同町では復興まちづくりが進むが、群生地一帯の土地活用方針は未定。白沢代表は「植物版の震災遺構・遺産であり、町の宝としてそっと残してほしい。津波

の脅威を伝え、防災・環境教育にも役立つはずだ」と指摘する。野沢副会長もビオトープ(生物生息空間)としての活用を促していく考えだ。平野公三町長は「ミズアオイに限らず、大槌は湧水やイトヨなど貴重な自然に恵まれている。復興まちづくりに郷土の財産をいかに位置付けるかが重要だ。しっかりと後世に残し、生かす方策を探りたい」と話す。

◎ **ミズアオイ** 水田のおぜや水辺に育つ一年草で、本県では7～9月ごろ青紫色の花を咲かせる。日本には稲作伝来とともに入ってきたと言われ、かつては花は染料、葉や茎は食用にされるなど里山文化との関わりが深い。水田雑草とされ除草剤などによる駆除で数が減ったため、環境省レッドリストの準絶滅危惧種やいわてレッドデータブックのAランクに分類されている。